

奈良高専 図書館だより

1989年2月 奈良工業高等専門学校図書室 発行

目次

1. 再読を楽しむ
神沢 和明
2. 読書感想文コンクール
総評と作品
3. 夜間開館について
4. 図書館利用調査について

再読を楽しむ

図書館委員 神沢 和明

あなたは繰り返し読んだ本がありますか。勉強のためとか、読めと強制されたのは別です。自分で選んで読んだ本の中で、もう一度手に取った本のことです。一冊でもあると、すてきですね。

私の場合、シェイクスピアの戯曲や「花傳書」は専門分野の書物なので除くと、ロスタンの戯曲「シラノ・ド・ベルジュラック」と「伊勢物語」が、最も数多く繰り返し読んだ本です。内容は頭に入っているのだから、新しい知識を得ようとして読むわけではありません。これらの本を手にするのは、いわば昔なじみの友人や先生と、交友を暖めるのに似ています。彼らが変わらずに良い友人でいてくれること、自分がそれを感じられることが、第一の喜びです。安心感ですか。気分が昂揚している時もありますが、それ以上に、落ち込んでいる時に力を与えてくれる、自分もまわりも、決してそんなに変わっていないんだと、思い直させてくれるのです。

時には違う顔、別の一面を見せて、「あれ、こんなだったかな」と思わせてくれることがあり、以前出せなかった答えを、不意に気付かせてくれたりもします。そのことはお互いの関係を新鮮にし、またの出会いを期待させてくれますし、自分の精神が少し変わってきていることを、誰に言われるよりも、すなおに納得させてくれます。こんなことは、もう良くわかっていますね。

繰り返し観たい映画や、コミックスにも再読に耐えるものがあります。でも、それに費やす努力や時間の大きさから、書物が最も大切な、そうした友人ではないかと思えます。いつでも自分が必要とする時に、そばにいてくれる友人。同じ書物でも、人によって触れ合い方は異なります。いつどこで出会えるとも知れません。数多く接することで、選ぶしかない。少しでも読書に時間をさいて、生涯続く友人を探してください。

昭和63年度

読書感想文コンクールを終えて

図書館委員会

毎年行われている夏休み課題図書（4・5年生は自由選択）の読書感想文コンクールは、今回で13回めになります。応募作品464編の中から、図書館委員会と国語科の先生方が慎重に選考した結果、次の

ように、13名の諸君の入選作を決定しました。氏名をここに紹介して、その栄誉をたたえたいと思います。

〔第1部：文学の部〕

最優秀	3	C	佐々	真弓
優 秀	4	MA	森本	泰正
優 秀	3	C	柏木	彩
佳 作	1	C	川西	雅子
佳 作	2	C	羽原	登世
佳 作	1	C	内田	真紀
佳 作	4	MB	吉村	朋郎

〔第2部：文学以外の部〕

最優秀	3	MA	逸崎	博紀
優 秀	1	E	市原	新吾
優 秀	4	E	小山	良彦
佳 作	1	I	酒井	直人
佳 作	2	E	坪田	範久
佳 作	3	E	小西	健一

この他に、選考の過程で優れた評価を得た諸君は、次のとおりです。氏名を記してその努力をたたえたいと思います。

1 MA 岩井 聡	1 MA 檜作 学	1 MB 志村 泰幸	1 MB 藤岡 恵
1 E 小西 一禎	1 I 伊藤 香代	2 MA 木谷 勝之	2 MA 和田 真純
2 MB 高野 浩史	2 MB 中東 和久	2 E 菊地 広寿	2 I 青井 紀子
2 I 奥村 直子	2 C 中島久美子	3 MA 新村 貴志	3 MB 三宅 伸弥
3 MB 村上 耕平	3 E 嶋津 博至	3 I 大蔵 教之	3 I 中山 美奈
4 MB 西垣 勝	4 MB 田中 弘文	4 E 生野 容正	4 C 松葉 和夫

選考の仕方は、昨年と同様に、〔文学の部〕と〔文学以外の部〕の2部立てとし、それぞれの部門から最優秀、優秀、佳作を選ぶことにしました。

応募提出の状況は、4・5学年の自由選択で49編、1～3年の課題図書では415編でした。その内訳を数の多い順に並べると、次のとおりです。

〔文学の部〕

坊っちゃん	(夏目 漱石)	146
太郎物語	(曾野 綾子)	49
車輪の下	(ヘルマン・ヘッセ)	44
青春の礎	(石川 達三)	29
夜と霧の隅で	(北 杜夫)	25
太陽の子	(灰谷健次郎)	22
夏の夜の夢	(シェイクスピア)	12
夢の島	(日野 啓三)	12

〔文学以外の部〕

「非まじめ」のすすめ	(森 政弘)	49
宇宙からの帰還	(立花 隆)	11
おとなになる旅	(沢地 久枝)	5
日本語のために	(丸谷 才一)	4
エレクトロニクスからの発想	(菊池 誠)	3
さくら隊 8月6日	(新藤 兼人)	1
影の現象学	(河合 隼雄)	1
苦海浄土	(石牟礼道子)	0
その他		2

この中から、第1次選考をパスした作品について更に選考を重ね、上記の諸君の作品を入選作に決定しました。選考の最終段階では、13人の先生方が、書き手の氏名を伏せて読み合わせ、投票によって決めました。その際には、何年生の作品か学年も考慮の対象に入れております。

総じて、今回の応募作品はどれもよく書けており、努力と苦心の跡がうかがえました。多くの作文を読み選考するのは苦しい作業ですが、文面から感じられる諸君の真剣さに励まされて、やり終えることが出来ました。「読んでよかった。」との一言に出会うと、苦労も吹っ飛んでしまいます。

入選作はいずれも、自分の目でしっかりと見、深く考え、的確な表現に努めており、高く評価できるものです。次に、その入選作を紹介しましょう。読み比べて、参考にしてほしいと思います。

〔第Ⅰ部 文学の部〕

「太陽の子」を読んで

3 C 佐々真弓

小さい頃、大きな厚い本は憧れでした。「太陽の子」というハードカバーの児童向きの本を、本屋さんで何気なく手にし買ってもらったのは、いつのまにか随分と昔のことになってしまいました。

「太陽の子」という題から幼い頭で連想したものとは、それは大きくかけ離れていて戸惑ったことを思い出します。読んでいて苦しい本など、それまでに読んだことがなかったからです。しかし、戸惑いながらも新鮮な驚きを感じたものです。そして今も……。

この本がなぜ苦しいのか、今ならよく分かります。それは、町中にいけば本当に転がっていきそうな現代の切実な物語として設定されているからです。この話は、どんなにつらくとも逃げ場がないということなのです。「ふうちゃん」は、現代に生きる少女です。この少女の驚き、怒り、悲しみ、喜び、それらすべてが怖いくらいに心に響いてくるのです。

戦争そのものの悲惨さだけなら、この話は絵空事の怖さで終りです。なぜって、私は戦争を知らないからです。けれどこの話は、戦後の現代という設定です。だから、私にもそれなりに理解できるのです。今を生きる人々を通して、戦争は嘘ではないこと、そして人間の幸せとは何であるかを訴え、問いかけてくるのです。語り口が素朴で飾り気がないだけに、素直に心に溶け込み、しみ透ってくるのです。

この本を読んで一番強く感じたこと、それは幸せってなんだろうということです。人を踏み台にして幸せになっているのは、他人のやっていることで、自分だけはそうではないと、これまでは思ってきました。しかし、本当にそうなんだろうかと考え込まれました。

私、多数決って本当は危険なんじゃないかって思う時があります。そうです。多数決は、少数の意見を踏み台にしていることが多いのです。少数の中には、私達も一緒に受けるべき苦しみや悲しみがたくさんつまっている場合が多いんじゃないかって、この本を読んでわかったように思います。でも人間は、自分自身が体験しない限り、他人の

苦しみや悲しみが来当はわからないんですね。

一例を挙げてみましょう。人殺しがあったとします。人殺しはもちろん悪いことです。けれどもなのです。その犯人を悪者にして社会から疎外し非難するだけで、うまくいくんでしょうか。その犯罪を生み出したのは、平和で民主主義の現代なのです。食べ物には困らないし、一見どこも悪くなさそうです。けれど殺人事件は、その社会に、小さな落とし穴があるってことを表していると思うのです。その穴を繕わない限り、またきつとどこかで悲しい事件が起こるに違いありません。多くの人は半ばそれに気付किながら、どうして直そうとしないのでしょうか。きっと、「その人には気の毒だけれど、自分でなくて良かった。」と無意識に感じているだけなのでしょうね。

この傾向は実に危険です。突き詰めれば戦争になってしまいます。そういうと、みんなの怪訝そうな顔が浮かんできます。でもそうなんです。戦争ってというのは、自分の国の利益のための争いです。それは、自分の組織が勝てば自分が守られるという考えが人々を戦争に向かわせるのです。けれど、他の人々をさしおき、踏み台にしてという考えをおし進めれば、最後には地球上にたった一人ということになってしまいます。極端かもしれないけれど、強ち嘘でもないと思うのです。だから、いくら少数の人々であっても、彼らを見捨てることは悲しい時代の序幕となるでしょう。本当の幸せを願うなら、誰一人落ちこぼれをつくってはいけません。この本は、戦争は突然でなくて、一人一人の心の中にある幸せへの責任感のなさがそうさせているということ、教えているように思いました。

この本にでてくるのは、沖縄で戦火をくぐった人達です。沖縄は、日本で唯一か所こだけが上陸戦になり、本土の犠牲になりました。この人達は、社会の落とし穴に突き落とされたのです。しかし逆に、幸せをたくさん知っていたのだと思いました。ふうちゃんのお父さんの病氣と自殺、キヨシ君の不良歴、それは、見せかけだけの幸せを幸せと信じていることへの危険信号として読めます。今、まだ穴が小さいうちに、なんとかしなければいけないのです。

戦時中、沖縄は、日本であるといわれながら、「もともと本土と沖縄は違うのさ。」というふうな結局扱われたのです。沖縄の人達の怒りと苛立ちを考えると、どうしたらよいのか怖くなってし

まうのです。でもこの人達は争うことが一番良くないことを知っているから、じっと待ちます。温かく、信じ許すことを知っているのです。人間は何もできないのです。思い上がりは自分の首を絞めます。けれどこの人達のように待つことは出来るのだと思いました。こういう人達がいる限り、きっと人間は大丈夫だと思います。そして、きっといつかはうまくいくって信じられるのです。

「夜と霧の隅で」を読んで

4MA 森本泰正

「民族と戦争に益のない人間は抹殺せよ。」それは第二次大戦におけるドイツ・ナチスの一方針である。この命令によって数多くのユダヤ人が殺害されたことはあまりに有名なことであるが、その片隅において不治の精神病患者もこの無益な人間の一部分とされ、彼らもまたガス室へと消えたのだ。この本を読んで私は、戦争の影響というのは形を変えて隅々にまで及び、そしてこの精神病患者の抹殺では、彼らとその医者たちの怒り、苦悩、そして絶望というものが戦争そのもの以上に彼らを襲っていったのだと深く感じた。

ナチスのこの不治の精神病患者に対する安死術施行の決定は、患者らの立場にたてばいくら戦争に益がないと言われても殺されなければならないなど、とても納得できなかったであろう。そんな馬鹿なことがあるか、死ぬなんてご免だ、と叫びたかったであろう。だが彼らは、不治の精神病患者である。彼らには反抗の態度はおろか、殺されることすら理解できないのである。従ってその患者たちが本来受けるべき恐怖と不安は、彼らを見守る数人の医者がすべて背負わねばならなかったと言えるだろう。医者たちは少しでも患者が回復のきざしを見せるように治療せねばならなかったが、治らないことは医者自身が最もよく知っている。こうして追いつめられたある医者は、異常とも思える治療を始めるのであった。一人の患者に電気ショックを連続してかけたり、インシュリンによる昏睡を危険な状態まで放置したり、また大胆な脳手術を行ったり、果ては効果の未知な常識外れの薬を注射したりするのであった。万に一つもない奇跡を期待してである。彼のどうしようもなく切羽詰まった気持ちは痛々しく私たちに迫ってくる。しかし冷静な私たちの立場から見れば彼

の行動は狂気に見える。そしてまた、治ることのない、先は安死の運命しか残っていない患者たちをいたずらに苦しめているだけにさえ感じる。彼の治療がエスカレートする度にそう思った。

私は今まで人が殺されなければならない時など、絶対はないと思ってきた。きっとこの医者もそう思っていたからこそ無理な治療に走ったのだと思う。だが彼のやるような過酷な手段しかなく、そしてその治療の結果患者たちがさらに悲惨な症状になっていくのを読んでみると、絶望的な患者には残りの命を静かに送らせてやった方がよかったのではないかとも思えてくる。今の時代なら奇跡を期待しての治療など行われなし、治り得ない病気にかかってしまったら、残りの命を平穩に過ごさせる方が多いであろう。だから無理な治療をして患者を苦しめたこの医者は間違っていたと思う人がいるかもしれない。しかし私は彼が悪いとは思わない。多分彼は医者として患者を助ける気持ちはもちろん持っていたろうが、それ以上にナチスに対する怒りを持って治療に当たったろうと思うからである。この怒りが彼をそうさせたと思う。彼は悪くはない。彼を極限にまで追い込んだナチス、そして戦争が間違っているからである。

この精神病患者の安死の施行からもわかるように、戦争はその戦いそのものによる恐怖以外にも様々な形で多大な影響を及ぼしているのだなということに気づいた。そしてまた、戦争は肉体的な傷だけでなく、精神をも狂わせてしまうということを強く感じさせられた。

この医者の傷ついた心は、平和のみが治し得る薬であろうと思う。

「坊っちゃん」を読んで

3 C 柏木 彩

「親ゆずりの無鉄砲で……」——もうおなじみの始まりである。坊っちゃんといえば、すぐこのオープニングが浮かんでくる。なぜかこの書き出しは、わくわくさせてくれるものがあって、大好きである。

こんな偉そうな書き方をすると、もう「坊っちゃん」は何度も読み返したように聞こえるが、恥ずかしいことに、最後まで読み通したのは、実は初めてだったのである。小学生の頃、塾の模擬テストには、この「坊っちゃん」がよく出題されてい

た。

だから、このオープニングから、腰を抜かしたり手を切ったり便所でお金を落としてしまうあたりまでは、何度となく読み返して知っていた。

書き出しが好きだと書いたが、一瞬、何ごとかと思わせる文章がトップに来ていて、それを徐々に、淡々と、リズム良く説明していき、いつの間にか、“坊っちゃん”の自己紹介がおおかた終わっている、そういうテンポの良さがすごくいいと思う。「坊っちゃん」全体がはじめからこの調子で、トントントンと続いていくと読みやすかった。後の解説のところに、「漱石は一週間でこの作品を書きあげたと推定される。」と書いてあったが、もし本当にそうなら、そのスピードが、この歯切れの良い文章の源であるようにも思う。

そして、何といっても、“坊っちゃん”の江戸っ子弁の一人称がいい。もしこれが、普通の言葉だったり一人称でなかったりすると、文章のリズムは狂うし、おもしろさは半減するだろう。その軽快な一人称と、竹を割ったような“坊っちゃん”の性格がぴったりと合っていて、いっそうこの話のおもしろさが生まれているように思うのである。が、私は、「坊っちゃん」の話は学校の先生が主人公なのだから、生徒に慕われるおもしろい先生の話だとばかり思っていた。確かに、おもしろい先生ではあるが、私の考えていたおもしろさとは違うものがこの話にはあった。結局のところ、“坊っちゃん”は、生徒にもあの町にもなじまないまま東京へ帰ってしまったわけで、想像とは全くちがったものだったのである。

“坊っちゃん”はまっすぐで、素直で、思ったことをくもらせず正直に伝える。そんなうらやましい性格や、山嵐、赤シャツ、うらなり君など、誰にでもあだ名をつけそう呼んでしまうあたりもなかなかおもしろく、大人であるはずの“坊っちゃん”が子供のように、少し不思議な気持ちがあった。それと同時に、私にはインテリに思える作者の漱石が、こんな単純で子供みたいな人物を主人公にして、自由気ままにさせているなんておかしいような気もしたが、人の価値を決めるのは難かしい学問ではなく、「心だ、生き方である。」と言っているようにも思えて、少しうれしかった。

けれど坊っちゃんは負けた。そして現在も、結局は生き方よりも学歴などが重視されることが多かったりする。赤シャツ達をやっつけはしたものの、勝者二人は辞表を出して去らなければならな

かった。正義が必ず勝つとは限らない。そのあたりがとても現実的であった。

けれども、ふんわりやわらかく感じるのは、やはり最後に清の話で括ってあるからではないだろうか。この作品の温かさは、大部分が清のことで占められていると思う。坊っちゃんが四国に向けて出発する場面では、漱石って、なんと素敵な文を書く人なんだろうと、ほんとうに感激した。「汽車が余っ程動き出してから、もう大丈夫だろうと思って振り向いたら、清はやっぱり立っていた。何だか大変小さくみえた。」という文章は、いつ読んでも胸がしめつけられるような思いがする。私はこの文章が、一番好きなところだ。何よりも“坊っちゃん”が、清のことをどんなに大切に想っているかが、よく伝わってきたように思えたからである。

子供の頃、「坊っちゃん」の冒頭のところを読んだ時は、自分が男の子じゃないことがとても残念に思えた。そして今でも同じで、“坊っちゃん”のようなまっすぐな男の子になりたいと思うのである。

「太陽の子」を読んで

1 C 川西雅子

この「太陽の子」は、私が小学校六年生の時に一度読みました。他にも灰谷健次郎さんの本は数多く読みました。小学校の時の私には、まだ難しい点もいくつかあって、本当の意味では理解していませんでした。そして、もう一度最初から読みなおしてみようと思い、この「太陽の子」を選びました。

物語の主人公であるふうちゃんは、神戸に住む小学校六年生の女の子で、明るい、頭の良い、優しい子でした。ふうちゃんのお父さんもお母さんも沖縄の人で、「てだのふあ・あきなわ亭」という琉球料理のお店を開いています。「てだのふあ」というのは太陽の子という意味で、ふうちゃんのことです。ふうちゃんには、たくさんの友達がいるので、ふうちゃんは幸せ者です。ふうちゃんのお父さんは、心の病気にかかっている、医学ではなおせないような病気でした。もう沖縄で戦争があって何年もたった今でも、ふうちゃんのお父さんの中では、戦争は続いていました。沖縄の人全員の心の中で戦争は続いていたのです。

キョシ少年も、その犠牲者の一人です。沖縄で生まれたという、ただそれだけのことで、同じ日本人でありながら、「沖縄モン」とバカにされいじめられます。私が小学生の時、同級生で故郷が沖縄の男の子がいました。その男の子も、時々クラスの友達に「沖縄のヤツはこれやから」とか言われていました。みんなは、もちろん、冗談で言っていたのだけれど、今から思うとその男の子はかなり傷ついていたに違いありません。沖縄の人間でない私たちには、本当の沖縄の人の苦しみはわかりません。けれども少しでも理解しようと努力しなければ、沖縄の人たちの心の中での戦争は終わらないと思います。

ふうちゃんのお父さんが亡くなります。ふうちゃんのお父さんの中では、ついに戦争というものが終らないままこの世から消えてしまったのです。けれども、ふうちゃんのお父さんには、ふうちゃんがいました。死んでいくお父さんにとって、何よりも大切な宝物のふうちゃんが傍にいたことだけが、せめてもの慰めであったように思われます。

ふうちゃんたちのように、胸をはって堂々と生きていくことは、とても難しいことだと思います。壁にぶつかった時に、その壁を力強く乗り越えていくということは、大切なことです。勇気もいるし、人の助けも必要です。けれど、ふうちゃんのような小さな子でさえ、こんなに立派に生きていると思うと、感心してしまいます。

また、ふうちゃんに関心を寄せた沖縄の文化は、すばらしいものだと思います。独得の文化であり、これからも残していかなければならないものです。その一つ一つが、生活の中から生まれてきたものであり、人々のかけがえのない歴史であると思います。それらのすべてを壊してしまうようなことはあってはなりません。戦争というものは、深く人々の心の中に悲しみや苦しさを刻みつけます。なぜ日本人同士が戦って、沖縄の人たちだけが苦しまなくてはいけなかったのでしょうか、私には分かりません。

私たちは、学校の勉強で歴史の年表を覚えます。けれど、ただ年号を覚えるだけでその事実をすませてしまいます。本当の意味で歴史を勉強することは、年号を覚えるだけでなく、その背後にあった犠牲も知らなくてはいけなくと思います。また、そこまで調べるには、多くの時間が必要です。でも、沖縄の人私たちと同じ日本人なのだから、私たちが沖縄について少しでも多く知るよ

うに努力しなくてはいけないと思います。

今、再び読んでみて、小学校の時よりも感動しました。小学校の時とはまた違った物の見方が出来ました。灰谷さんの、微妙な美しい表現などにも目をやることができ、細かい一つ一つの箇所にも感動してしまいました。また読む機会があれば、同じ作者の他の作品も読んでみたいと思います。

「青春の嗟跌」を読んで

2 C 羽原登世

江藤賢一郎、大学生。司法試験を受験する。いつも冷めた目で全てを見据え、全てを計画の上で進行させる彼に失敗はないはずであった。何故彼は嗟跌したか。そして何故彼は登美子を殺さねばならなかったのか。

彼はそれまで失敗をしたことがなかった。計画したことは必ず実現させた。そして思い通りになる自分に満足感を、他人に対しては優越感を持っていた。

彼はいつでも登美子と別れられると思っていた。しかし別れられない。若さゆえに、のことである。登美子は美しいものを求めすぎたのかもしれない。しかし求めながら矛盾の中には進んで身を投げているのだ。それは女の悲しい習性なのかもしれない。

この世界の人間は、計算をしながら生きている。立身出世、幸福な生活、事業の成功、老後の人生……。その計算のどこが悪いのだろう。多かれ少なかれ人生というものは計算なしでは生きられない。

彼は革命家の友人・三宅を救おうとはしない。それはつまり、三宅の人生に希望がなくても、彼は三宅にはかなわない。だから三宅が道を誤っている（彼にいわせると）、彼は安心して勉強ができるのだ。彼は自分の計算高さを知っていた。冷たい人間だということも。彼はいつでも「人間的」に振舞えると思っていた。試験に合格し、輝かしい栄光が確実になれば……と思っていたのではないか。しかし彼は若く、甘かった。冷たい人間になり切れなかった。

彼は計算外のことをする時、口実をつくらないと動けなかった。いつも矛盾を正当化しながら生きていた。これがなければ嗟跌はなかったかもしれない。

彼はつまづいた。それを火事で焼け出された夫婦の姿を見た時に思い知った。だがもうすでに全ては終わっていたのだ。何故、人はいつも手遅れでなければならぬのだろう。

ある本に、殺人を犯した人が次のように述べている所がある。

「自分はもともと悪いことなどする人間ではなく、殺人などということから縁遠い人間である。山道を歩いていて崖から足を踏みはずしたような感じだ。」

……彼の心理もこのようなものではないだろうか。

彼は立ち直れただろう。登美子の裏切りがなければ。欺くつもりが欺かれていた。初めて彼は人間の計算し得ない部分をいやというほど知ったのだ。登美子の裏切りによって彼は自分の責任を放棄し、そしていつまでも登美子を恨み続けるであろう。これこそが礎石なのだ。

この作品は果たして礎石だけなのであろうか。礎石という二文字で人生を括ってしまう石川氏に一種の冷酷さ、社会の厳しさを感じる。他人にしてみれば彼の礎石はとるに足りないものなのである。

石川氏は彼を救おうとはしない。念を入れて絶望の中に落としている。これは人には人を救えない。救えるのは自分だけであり、そしてそのチャンスは少ししかない、ということだろうか。

彼の母はいつでも客観的だ。この母の目は石川氏の目でもあるのではないだろうか。客観的に見ることが、石川氏の主張なのだ。

……石川氏が唯一、彼を救っているのは、彼のつまづきが、「青春の」礎石である、ということだけなのである。

「車輪の下」を読んで

1 C 内田真紀

私が夏季休暇の間に、この「車輪の下」を読むと思ったのは、昨年、自分が体験した受験にかかわる内容が書かれてあったからです。私の体験した受験や、それまでの経験とは異なる点が多かったのですが、主人公ハンスの気持ちに同情でき、共感が持てる部分も多くありました。

ハンスという少年は、小さな町の普通の学校に通っていましたが、その中でもずば抜けた天分のある子供でした。彼の父親、校長先生、牧師さん、

近所の人々、それに同級生からも認められ、期待されていました。そのため、彼の将来はもう決まっていた。州の試験を受けて神学校に入り、大学に進んで、それから牧師か教師になる。誰が決めたわけでもなく、彼自身が決めたわけでもなく……。

ハンスには自分の意志というものがなく、周囲の人々に押し流されるままに将来を決めてしまっています。そのことに、少しでも不安や不満も感じることがなかったのでしょうか。自分の真実の意志に気付くのが遅すぎたのでしょうか。それとも、気付かないまま死んでしまったのでしょうか。

ハンスは、州の試験に2番で通ることができました。その時の彼は、満足感でいっぱいだったでしょう。今まで夢中でしてきた努力が報いられたわけですから。目的もなく、周囲の期待という重すぎた荷物を背負っていた彼には、安堵の気持ちしかなかったのだと思われます。神童だというレッテルが破られることを、どんなに恐れていたのでしょうか。

学校に通い始めてからのハンスは、一番の成績をとってやるという目標はあったものの、現在、自分がおかれている環境や立場に、少しずつ不満を感じるようになってきました。というのも、ハイルナーとの出会いがあったからだと思います。ハイルナーは、自分の意志に背くことに耐えられなくなって、学校を抜け出したのだと思います。結果的には、学校を追い出されることになったのですが、自分の意志に忠実に生きることができるようになっただろうと思います。ハンスは、神学校の先生たちに、ハイルナーに影響されて段々成績が下がったように言われていましたが、それは、ハイルナーによって、ハンスの意志が目覚めさせられたからだと思います。ハンスもハイルナーと同様、学校をやめて自由になることができましたが、それはもう遅すぎたのです。ハンスは、周囲の人々によって、ずたずたに引き裂かれた後だったからです。それに気付かず、立ち向かうことのできなかつたハンスの未熟さ、弱さというものが残念でなりません。

ハンスは故郷へ戻ります。毎日を自由に過ごせたのですが、それは、二年も三年も昔の、幼年時代を懐かしんでいるだけのものでした。もはやハンスには、過去の思い出しか残されていなかったのです。新しい喜びを見つけ出すため、見習い工になりましたが、喜びを見つけ出すことができない

いま、一週もたたない間に、ハンスの、あまりにも短く、苦しすぎた一生は終わってしまったのです。

この本は、私に、自分の意志というものをしっかり持ち、それに忠実に生きることの大切さを教えてくれました。周囲の意見に流されず、自分を見失うことのないように、私自身の人生をしっかりと歩んでいきたいと思えます。

「バイセンテニアルマン (二百歳の人)」を読んで

4 MB 吉村朋朗

1. ロボットは人間に危害を与えてはならない。また何も手を下さずに人間が危害を受けるのを黙視してはならない。
2. ロボットは人間の命令に従わなくてはならない。但し第1原則に反する命令はその限りではない。
3. ロボットは自らの存在を護らなくてはならない。但しそれは第1、第2原則に違反しない場合に限る。

これは「ロボット工学三原則」と呼ばれるもので、ロボットの服従性、奴隷性を示しており、ロボットというものは絶対にそれに従うように作られている。つまりロボットは完全に奴隷であり、便利な機械であるように作られているのである。

しかし、この作品に出て来るロボットは人間になろうとし、人間として認められたのである。そしてその過程において、人間というもの、何が人間という事なのかをこの作品は私達に語りかけて来るのである。

この作品の主人公は一台のロボットである。マーチン家に召使いとして買い取られ、家族に、2人の娘ミスとリトル・ミスに愛され、アンドリュウと名付けられた一台のロボットである。

彼は人間になろうとした。ある意味で彼はすでに人間であった。人間に似た体を持ち、創造力を持ち、感情を持っていた。しかし彼は人間達に人間だと認めてもらいたかったのだ。そしてそれによって、自分は人間だと思い込みたかったのだ。

人間は彼を人間と認めようとはしなかった。私はそれは妬みの為だと思う。確かに人間のプライドという問題もあるだろうが、それよりも妬みの方が大きいと思うのだ。自分より優れた者、しか

もそれが自分達の下の方、奴隷であるべきロボットであるがゆえにその妬みは大きくなっているのだ。

しかも、彼はだんだんと人間に近付いて来る。人々が人間だけのものだと思っていた自由を持ち、服を着、人の外観を持ち、物を食べずらす。人間達は彼が人間に近ければ近い程、その功績が大きければ大きい程妬みを増すのだ。何故なら人々は、自分より勝った機械を認める事は出来るが自分より勝った人間を認められないからだ。

彼はそこに気付いた。そして、人間より一番優れた点、昔から人間がすべてに換えて手に入れようとしたもの、不老不死を捨て去り、死を受け入れようとするのだ。その犠牲により彼は人間と認められる。

しかし、もし彼が心を持った唯一のロボットでなかったら。そしてもし彼が人間となった後も存在し続けるとしたら、彼は人間と認められたのだろうか。やはり認められはしなかっただろう。

もし、リトル・ミスならば、
「彼は人間よ。だって彼は私達と変わらないじゃない。」

と、言うだろう。しかし普通の人間は、やはり自分より優れた者への妬みを捨てられないのである。そして、私もその人間の一人として妬む心を持っているだろう。しかし私は1つ、人間の弁護をしたい。人間は確かに妬みを持っている。だが、人間はその裏返しとして、優しさを持っているのだ。そしてすべての点において自分達より優れた人間はいない。だから人間はすべての人に優しく出来るのだと。そして人間は皆、リトル・ミスのようになろうとしているはずだと……。

〔第Ⅱ部 文学以外の部〕

「宇宙からの帰還」を読んで

3 MA 逸崎博紀

私が幼いころ、一番最初にねだって買ってもらった本は、宇宙の図鑑であった。小学一年生のことである。図鑑に何がのっていたか、ほとんど忘れてしまったが、惑星や星雲、銀河の写真が大変美しかったことだけは今も覚えている。しかし、今そういうものを見ても、あまり美しいとは思わな

くなった。それは、宇宙への憧れの気持ちが薄れてきているからではないかと思う。その憧れをもう一度思い出せるかと思っていたところに、前から読みたいと思っていたこの本を、選定図書の中に見つけたのである。

この本は、実際に宇宙に行った宇宙飛行士たちの証言をもとにして書かれたものである。地上に比べて、宇宙空間の環境はあまりにも過酷である。宇宙には空気がないし、水もない。宇宙服や宇宙船という地球環境の一部を持って行かなければ、人間は生きてゆくことができない。もし、宇宙船の壁に穴などあたりすれば、気圧が下がり、体じゅうの体液が沸騰して、全身が風船玉のようにふくれ上がり、やがて破裂して死んでしまうという。この箇所を読んだ時、その光景を想像して体じゅうに寒けが走った。こんな恐ろしい所には、行きたくないと思った。なぜこのような所に、宇宙飛行士たちは行ったりするのだろうかとも思った。

また、宇宙空間では多くの奇妙な現象が起こる。一例をあげると、地球重力と軌道をまわる宇宙船の遠心力とがつり合って、一見、物体に力がかからない状態になっている無重力と呼ばれる現象が起こる。水を飲む時には、空間にホースから水を出せばまるい玉になってこぼれないし、寝るときも寝袋に入って、フワフワ流されないようにフックをかけておくだけでよい。色々便利に見えてその反面、物を動かすのに力がほとんどかからないから、必然的に筋力が落ち、骨が弱くなる。ある宇宙飛行士は、地球に帰ってきた時、祝福の花束を渡された時に、あまりの重さに悲鳴をあげたという。この変わった現象に私は大変興味をもった。地上では絶対起こりえないことだからである。

しかし、興味深いのは、そうした外的な変化だけではない。私は宇宙飛行をした人間は内面的にはどう変わるのかを知りたかった。宇宙飛行士のその後の職業を見ると、会社の社長や政治家や環境保護団体の会長や、キリスト教の伝道師になった人さえいる。宇宙飛行士とは関係のない職業が多いので、これはなぜかと思った。

宇宙に行った宇宙飛行士は、しきりに宇宙から見た地球の美しさを語る。暗黒の大宇宙にぼっかりと浮かぶ青い球。その美しさは、筆舌には尽くしがたく、どんな写真よりもすばらしいという。ある飛行士は、「このようなすばらしいものが存在するのは、とても偶然の産物とは思えず、そこに神の意志を感じた。」と、語った。また低軌道

をまわった飛行士は、地球の夜の部分に入った時に、ベトナム戦争の戦火を見て、環境保護の団体を結成した。

そうした、いろいろな体験が語られているのを読み終えて、私は改めて宇宙に行きたくなった。ふだん地球の表面を中心にしてしか行動せず、物ごとを考えない私たちが、地上何万kmという所から、ちょうど神が地上を見るように地球を眺めたらどう見えるだろうか。同じ星に住む者同士でありながら、国と国とが対立し飢えと貧困がなくなる。なんと情けない姿であろう。

狭い視点から見るのではなく、もっと広く大きな視点に立つのでなければ、いつか人類は共倒れしてしまうだろう。そうならないためにも、人類は宇宙へ進出して、地球生物から宇宙生物に進化しなければならぬ、と最後に思った。

「宇宙からの帰還」を読んで

1 E 市 原 新 吾

この本に書かれているほとんどは宇宙飛行士のインタビューや、宇宙飛行士になるまでの遍歴などだが、僕個人としては前半に書かれていた宇宙に関する物事の説明の方が面白かった。

僕はいままで宇宙船の壁に穴が開いたり、あるいは船外活動中の宇宙飛行士の宇宙服が破けたら酸素がなくなって窒息死するのだとばかり思っていた。しかし実際は体液が体温で沸騰点に達してしまい、体内にガスが充満し、口や鼻などからガスが吹き出し、全身が風船玉のようにふくれ上がり、やがて破裂して死んでしまうのだそうだ。頭の中で想像してみたが、なんだかB級ホラー映画のようなものしか想像できなかった。これなら窒息死のほうがずっとましだと思った。

それから僕は地球と月の時間がちがうということにもおどろかされた。よく考えてみればあたり前のことなのかもしれないが、僕は今の今まで全く考えもしなかったことである。月では、日の出一昼間一日没一夜間一日の出の一周期に要する時間が地球の27.3倍なのだそうだ。ということは、月時間の一日は地球時間で27.3日間にあたる。だからといって月で生活する場合、地球時間で8日間眠り続けてもいいということにはならないだろうけれど。

宇宙飛行士のインタビューや遍歴などの部分は

宇宙飛行を経験する前と後での、精神的な変化などが書かれている。インタビューされた宇宙飛行士がすべてアメリカ人だからなのか、精神的変化が宗教に関する面に表れているのがほとんどだった。僕は別に宗教など信じていないので、この地球は神が創造したものだということも信じていない。しかし実際に宇宙飛行を体験した人々のほとんどが、宇宙から見た地球はとても美しく、なにもかもが見事に調和されていて、とても偶然にできたものとは思えないと言っている。そして神が存在していることを確信したそうだ。

僕は今まで宇宙飛行といっても距離が長いだけきれいな景色などが思い出に残ったりする普通の旅行のように思っていた。たしかに宇宙飛行士はとても厳しい訓練を受け、大切な知識をたたきこまれ、宇宙という非常に危険な場所へ放り出されるのだから、普通の旅行とは全くちがうだろう。しかし、それがこんなに大きな精神的変化を宇宙飛行士にもたらすものとは全く思わなかった。もし僕が宇宙飛行を体験することができたら、精神的変化は起こるだろうか。その変化はどのようなものだろうか。とても知りたい。

はたして僕に宇宙飛行を経験するチャンスがあるだろうか。ライト兄弟が初めて空を飛んでから宇宙飛行に成功するまで60年。もう60年もすれば、誰もが宇宙旅行のツアーに参加できるようになっているかもしれない。もしそうなれば僕は必ずそのツアーに参加するだろう。頭の中でいくら「宇宙から見た地球」を想像してみても、実際のものとは全くちがうだろう。生きている間に宇宙へ行きたい。いろいろ考えていると今から胸がドキドキしてしまう。僕の夢をかなえるには宇宙開発をどんどん進めなければならないだろう。しかし国と国との醜い争いを宇宙へ持ち出すような宇宙開発はしないほしい。なぜなら、僕が宇宙旅行のツアーに参加できなくなってしまうからだ。

「アメリカの制裁」を読んで

4 E 小山良彦

日本が戦後、焼け野原の廃墟からアメリカの援助と教育により今日の経済大国に成長したことは、誰もが認識していることで、現在も日本にとってアメリカは、多大な庇護を受けている重要な国であります。しかし、僕たち国際政治に疎い人間で

さえ、諸外国から日本は、たたかれていると感じることが起っています。東芝ココム事件、貿易摩擦など、はたしてこのままでエネルギー皆無の日本は、現在の国際的地位を保つことができるのか、将来不安だらけのように思われます。事実、僕はこの本を読むにつれ国際状況、外交面の各国の対応を知るうち、アメリカは日本を捨てる、あるいは、捨てるを得ないという状況がすでに現実のものとなりつつあり、日本は、窮地に立たされていることを痛感しました。

なぜ日本が捨てられるかの理由に、第二次世界大戦後のアメリカの世界戦略上の変化があります。大戦直後のアメリカの戦略は、二つの大国に加え、中東、中南米、アフリカなどの紛争にも、力でねじふせる「二・五」戦略というものでありました。しかしベトナム戦争により想像以上の多大な出費により、戦略縮小の「一・〇」戦略にせざるをえなくなり、かつてソ連を押しやることのできた強いアメリカは、パワーを失い、強者の貫禄さえも消え失せたと述べられていました。

ベトナム戦争は、枯葉剤の後遺症などの問題で知ることはありませんでしたが、インフレ、失業者の増加、ドルの威信低下を招くなど、これほどまでにアメリカの後遺症になっていようとは知りませんでした。アメリカ映画に代表されるように、夢のあるパワーみなぎる国だと思い、僕は憧れていましたが、意外にも日本を捨てるをえないアメリカの苦悩を知って驚きました。

1963年、ベトナム戦争の深入りを防いだであろう、ジョン・F・ケネディ大統領の暗殺により、アメリカは戦争そして、弱体化へと進んだと強く主張されていましたが、アメリカの根本的な民主主義を忘れ、戦争への道を歩むようでは、自由の国アメリカのイメージが崩れそうで、残念に思いました。このように、大きな誤算であったベトナム戦争以後のアメリカの対日意識は、日本の成長に伴い、ソ連と同等の敵とみられて不思議でないものになったとあります。まだ僕達の耳に新しいIBM事件からもそれを窺うことができます。このIBM事件について筆者は、日本を狙いうちにするために十分に練り上げられた計画のもとに行なわれたのがこの事件で、細部にわたって演出効果が仕込まれていると述べています。日本の技師が機密文書を盗み出せるようにしたのは、FBIのエージェントだとしてつけ加えており、アメリカは、自動車、家電製品で日本に抜かれ、軍事力で重要

なエレクトロニクスの分野で、強いアメリカを保持せんがために、世界に日本のコンピューター技術は、物真似にすぎないと声高に伝えようとする政治的意図があったとあります。数多く発生している産業スパイ事件の中で、日本だけをテレビを巧みに使ったマスコミで騒ぎたてる対応からして、日本は愛し合っていた恋人にふられたというより、裏切られたというのが適切で、アメリカに対してあまい考えではいけないと感じました。

これらアメリカの日本に対する制裁に対して、ただ I'm sorry! と答えるだけでは、日本の国際的地位も落ちるのではないのでしょうか。筆者は、アメリカやソ連、先進国に限らずその他の国々でも、スパイが常時諸国を探り、自国の利益を生むようにしており、日本はスパイの巣であると述べています。だから日本は、他の諸国の裏の裏である情報を収集、予測するとともに、周囲の現実にも順応する能力、生存への執念が必要であると思います。それができずとも、新聞にある外電の記事を読みアメリカと世界の動きを知ることも大事ではないのでしょうか。僕たちが、将来エンジニアになり、アメリカやその他の国々へ出るときでもそのことは、大切なことだと思います。

「非まじめ」のすすめを読んで

1 I 酒井直人

「非まじめ」とはどういうことなのだろうか、とこの題を見て思った。「不まじめ」「まじめ」と、どこがどう違うのだろうか。「非まじめ」とは、「不まじめ」でもなく、「まじめ」でもなく、またそのどちらだということもできない状態であろう。しかし、ただ想像しているだけでは、どのような状態が「非まじめ」なのか分かるはずもない。そこで、「非まじめ」を知るために、この本を読んでみることにした。

この本の筆者はエンジニアである。ロボットを研究したり、自動化のことを研究していくうちに、「非まじめ」という新しい言葉を作り上げたそうだ。「非まじめ」とは、「吾輩は猫である」の猫の目で人間を見ることだと言っている。

例をあげると、エンジンのシリンダーは丸である。丸以外の物はないし、丸以外の物は考えつかない。これは「まじめ」な考え方である。ところがある「非まじめ」な人は、四角くすればどうか

と考えた。丸を四角にすることにより断面積が上がり、断面積が増えたぶん馬力が上がり、効率がいい。「非まじめ」というのは、一見常識とされていること、この場合はシリンダーが丸いと思われていることを、自由に考えることの出来る柔軟さをいうのだろう。

もう一つの例は、一円玉である。一円玉は丸いのが常識である。たしかに正面から見れば丸い。ところが一円玉を横から見ればどうか。これは四角に見える。まじめな人は丸いと答え、不まじめな人は四角いと答える。ところが「非まじめ」な人は、丸であり四角であると答える。つまり、「非まじめ」とは、まじめな要素と不まじめな要素の両方を持つということが言える。

筆者は、遊ぶように仕事をし、仕事をするように遊ぶと言っている。これも「非まじめ」である。ところが「まじめ」は、遊びは遊び、仕事は仕事と分ける。これはまずいと言う。遊びと仕事を分けない「非まじめ」人間は、百の仕事をする、百遊ぶことになり、合計二百生きられる。ところが、遊びと仕事を分ける人は、五十の仕事をする、五十しか遊べない。こう考えると、「非まじめ」はすごく理想的だと思う。

「非まじめ」という発想はすごく難しい。けれど、ものの見方を変え、おもしろがること、興味をもつことである。データや数字、重さ、それぞれについて知ろうとするのが普通であるが、その知識の世界から外へ出ることが大切なのだ。

「非まじめ」とは「まじめ」の対立概念でありながら、「まじめ」も活かし、「不まじめ」も活かした第三の概念であると言える。またそれらの二つから大きくはみ出した、次元の違うものであるということが出来る。「非まじめ」のためには、外から知識を得ようとはせず、新しいものを発見する、つまり内側から湧き出させることが大事である。そうすることによって、「非まじめ」というものが生まれてくるのである。創造をしてアイデアを出す、毒を薬に変えるというような見方が必要であると思う。また、「非まじめ」になるには謙虚さも必要であると思う。

何か、「非まじめ」は難しいように思ったが、「非まじめ」になれば世の中での考え方、興味、感覚などいろいろな物に変化するのだろうと思う。違った色の世界にいる人は、生活が新鮮で楽しめるのだろうと思う。筆者のような人はまさしくその通りであると思った。

「おとなになる旅」を読んで

2 E 坪田 範久

僕がこの「おとなになる旅」を選んだ理由は、幼女時代から少女時代、娘時代へと、おとなになっていく過程をどのように表現してるかを知りたかったし、なにより国語力のない自分には読みやすい本がベストだろうと思ったから、この本にすることを決めた。

この本を読んでまず最初に感じたのは、満州にいた幼女時代から少女時代、娘時代までの、その時代に起こった出来事・経験などを織りまぜながら、おとなになっていく過程を、明確に表わしているということだった。

本文の中に、作者の少女時代の学校教育について述べているが、それを読むと少し怖い感じがした。ちょうどそのころは戦争中だったわけだが、敵性語である「英語」の授業がないというのである。そんな馬鹿げたことがあってもいいのだろうか。いくら今と昔の教育方針が違うといっても、敵の言葉だからといって、教えない教育は間違っていると思う。それでは「教育」という文字に反しているではないか。「当時の学校とは、なんだったのか」と言いたくなる。

また、この時代に作者は、「自分の命をかけてでも戦おう」と、考える。今までこれとはまったく逆のことを考えていた作者が、このような考えに変わってしまうということは、当時の日本の徹底した軍国主義の教育ぶりが感じられた。こういう徹底した教育であったから、国民は「死」をおそれなかったと思う。「おそれなかった」というよりも、「おそれないように教育した」というほうが正しいかもしれない。もし自分が、この時代に生きていたらどうだったろう。やはり、洗脳されて、死をおそれない気の狂ってしまった人間になっていたかもしれない。考えただけでも、とても恐ろしい感じがした。

僕はこの本を読んで、戦争の裏側の部分を知らされたと思う。

今まで、戦争については、何度か歴史で勉強してきた。しかしそれは、「いつ、どこで、何が」というふうに、一つの出来事としてしか学んでいない。それで知ることができたのは、表の部分にしか過ぎない。

しかし、この作品で知ることができたのは、戦争の裏側の部分だと思う。単なる出来事を表わすのではなく、例えばその出来事に対する人々の反応、戦前から戦後にかけての生活環境の変化、戦争によって変えられた作者の「死」に対する感じかたなど、作者が「おとなになる旅」において実際に経験した出来事を素直に表現しているところだと思う。

作者は、「おとなになる旅」において、いろいろな思い出が、あるだろうと思う。――満州の大自然、あわてんぼうだった小学校時代、弟の死、戦争、本国への引き揚げ、満州にいた時の喜びや悲しみ、苦しみなど、どれもこれも今ではいい経験をしたと思っていることだろうと思う。

この本を読んで、あらためて「戦争とは何だったのか」を知ることができたと思う。またこれをきっかけに、さらに考えてみたいと思う。それが僕にとっての「おとなになる旅」かもしれない。

『「非まじめ」のすすめ』を読んで

3 E 小西 健一

「まじめ」「不まじめ」を越えた「非まじめ」発想というこの本の紹介が、私にこの本を読ませるきっかけとなった。自分で書くのもおかしいが、私はまじめで几帳面なほうである。この「まじめ」を両親に言わせると、「融通のきかないガチガチの頑固者」になるのだそうだ。そこでこの本を読んでみれば、今までガチガチだった考え方が少しは変わり、発想の転換も出来るかもしれないと思って、この本を読むことにした。

最初の章に、ハイドンの「非まじめ」という文章がある。ハイドンはクラシックの音楽家であったが、普通の音楽家とは少し違った面白い人物であった。当時は、ステレオやレコードのない時代であったので、貴族らはお抱えのオーケストラを持っていた。が、オーケストラはこき使われて休む暇がなく、ついには楽団員がむくれ出してしまった。時代が時代だけにストライキをするわけにもいかない。そこでハイドンはどうしたかというところ、楽団員が自分のパートを演奏し終えると舞台から引き下がることの出来る「さよなら交響曲」なる曲を作ったのである。この曲の演奏を聴いた公爵は、楽団員が一人、二人と引き下がるさまを見てフッと思い当たり、このオーケストラに休暇をあ

たえたのだそうだ。

これは、素晴らしい考えだと思う。「まじめ」な人間ならば、「我々は公爵のお抱えなのだから文句を言うな。」とか言うかもしれないし、「不まじめ」な人間ならば、その時代でもストライキを決行したかもしれない。しかしハイドンは、それらを超越した「非まじめ」の発想を応用し、いがみあいもなく見事に解決している。

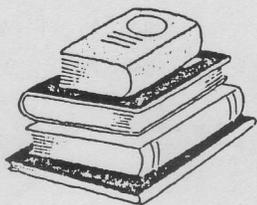
読み進めていくうちに、印象に残っているのは、「サイコロを1億個作る」の話である。サイコロの穴に色を入れるかわりに、サイコロ全体に色を塗って、その表面の塗料だけをけずる方法で、短時間で1億個作ることに成功したという話である。これは、「色を入れる」かわりに「色をけずる」という「非まじめ」な発想である。

この話で思い出したのだが、中国の「三國志」で、かの天才軍師諸葛亮孔明が、十万本の矢を作れと命ぜられる。そこで孔明はどうしたかという、霧の中に人形を乗せた船を出し、敵軍が人と間違えて射た矢を集めたのである。このやり方も「作る」かわりに、「敵の矢を集める」という孔明の「非まじめ」な発想によるものである。

これらについて共通に言えるのは、「一点を凝視しない」ということである。一点を凝視すれば、その一点以外のものは目に入らなくなる。そこから退いてみて、まんべんなく物を見ることが出来れば、つまり「まじめ」から退いて「非まじめ」な発想が出来れば、物ごとに対して柔軟に対応することが可能である。

物ごとに対しては、「まじめ」一辺倒ではいけないのである。「押して駄目なら引いてみな」の精神で、一歩さがって全体を見渡せば、おのずと解決の糸口はつかめるのである。

これが「非まじめ」の概念であり、人間はみなこの「非まじめ」を生かすようにしなければならぬのである。おもしろい、そして深く教えられた本であった。



夜間開館について

学生諸君の積年の願いだった“図書館の開館時間延長”が実現しました。実施後まだ4カ月余りしかたっていませんが、順調なすべり出しといったところですよ。全校生対象のコンピュータ貸出と相まってか、入館者数、貸出冊数は、昨年、一昨年と比べると大幅に伸びています。

従来から、本校の貸出冊数等は、全国高専中でも上位に位置していましたが、この調子でいけば、トップの座も夢ではありません。(1988年の日本の図書館、日本図書館協会編の統計によれば、奈良高専の貸出冊数は62高専中27位)

やはり、貸出冊数は、知的欲求のバロメータでもあります。昼夜を問わず大いに図書館を利用して、貸出冊数を増やして下さい。

夜間にお世話下さっている3人の職員の紹介を兼ねて一言ずつ書いてもらいました。

① ② ③ ④

①初めて奈良高専の横をバスで通った時、「アラ、ここに国立の工業高専があるのか」と思いました。当時は、私には何のかかわりもありませんでしたが通るたびに、木々の間から広い校内を又学生さん達の通学風景など眺めておりました。その高専の図書館で私は今、貸し出し業務等のお手伝いをさせてもらっております。やっと4カ月少々が経ちなんとか日常業務を3人の輪番制で勤務しております。まだまだ不明なことにぶつかりながら、職員の方、図書館利用者の方々に御迷惑をかけながら……。3時間が“アッ”という間に経ってしまう日もあります。返却図書の中に関心のある本に出会うとパラパラとページをめくり、メモを取ります。いつかその内私もこの本をお借りしたいと。

何もわからない専業主婦業の私でしたが、何とかお手伝い出来るようになりましたので、これからは、勉学に励んでおられる高専生の方々の少しでもお役に立てるように、又、胸がドキドキするような図書との出会いがあることを楽しみにしながら頑張らせていただきます。

沢山の本に囲まれてお仕事できることを幸せに思っています。

(湯沢和子)

○20数年間、専業主婦として子育てに専念してきた生活から、社会人、第一歩を踏み出して、早4カ月余り、不安と緊張感と戸惑いの中、温かい職員の方々に囲まれ、又、学生さんに専門書の配架で、教えていただくことも多く、目下、勉強の中楽しく仕事に励んでいます。

世間の評判どおり、校内の雰囲気も良く、コッコツと真面目に努力し、勉強に取り組まれる学生さんの多いことに驚きと感心をしています。このような学校で働かせていただけることを、嬉しく誇りにさえ思っています。

今、私は若い学生のエネルギーを一杯に受け、希望に満ちあふれています。これからは、人との出会いを大切に、一人でも多くの方に利用していただけるように心がけ、努力し、これを私の励みにしていきたいと思っています。

(吉崎治代)

○図書館でお仕事をするようになって早くも4カ月が経ちました。初めは戸惑うことも多く、気が付いたら閉館時間という毎日でしたが、最近になってようやく本をお借りする余裕もできてきました。

高専の学生さんは専門書以外にもいろいろな本を借りていかれるので感心しています。又、テストが終わり、ひと気のない図書館で一人本を読まれる学生さんを見掛けて、私も負けてはいられないと刺激を受けたこともありました。

ようやく慣れたところですが、図書館でのお仕事もあと少しとなりました。その間に、この良い環境を利用させて頂き、できるだけ多くの本を読もうと思っています。みなさんもどんどん利用してください。

(土海弘美)

残念ながら土海さんは3月で退職されます



〔お知らせ〕

一昨年のアンケートで、一番要望の多かったA/V機器が設置され、1月から貸出を始めました。現在のところはまだ機器だけの利用(ソフトは各自持込)ですが、1月中に既に45件の利用がありました。

委員会で検討の結果、次のビデオ、LDを購入することが決まりました。お楽しみに!

- 市民ケーン O・ウェルズ監督等 日本ビクター
- ウェストサイド物語 R・ワイズ 日本ビクター
- J・ロビンズ "
- ローマの休日 W・ワイラー "(LD)
- スターウォーズ J・ルーカス "(LD)
- アラビアのロレンス D・リーン "(LD)
- 史上最大の作戦 K・アナキン "(LD)
- 風と共に去りぬ V・フレミング
- 生命の神秘 J・アルガー バン
- 戦場にかける橋 D・リーン 日本ビクター(LD)
- ラストエンペラー B・ベルトリッチ 日本ビクター
- ビデオ学習システム 斉藤信男他 岩波
- ビギナーズUNIX
- ハムレット R・オリビエ CG東北
- 天井桟敷の人々 M・カルネ CI(LD)
- 魔笛 ミュンヘンオペラ "
- サバリッシュ
- くるみ割り人形 英国ロイヤルバレエ 日本ビクター(LD)
- 2001年宇宙の旅 S・キューブリック HPポニー(LD)
- 荒野の決闘 J・フォード CF
- 第三の男 C・ロード 日本ビクター
- モモ M・エンゲ 朝日新聞
- ゴジラ 橋本幸治 東宝
- 雨月物語 溝口健二 大映
- 羅生門 黒沢 明 大映(LD)
- 用心棒 黒沢 明 東宝(LD)
- 風の谷のナウシカ 宮崎 駿 徳間(LD)
- 仁義なき戦い 深作欣二 東映

図書館利用調査（回答者 785名）

昨年10月末、全校生対象に、図書館利用調査のアンケートを実施しました。その結果を主だったものを抜粋して簡単に報告します。

（問1）図書館をどの程度利用していますか

- ア ほぼ毎日（53人） イ 週に2、3度（183人） ウ 週に1度（160人）
エ 月に1、2度（160人） オ ほとんど行かない（141人） カ 全くいかない（22人）

（問2）利用の目的（3つ以内）

- ア 雑誌、新聞を読む（291人） イ 一般書を読む（144人） ウ 自習・レポート作成（519人）
エ 図書を借りるため（250人） オ その他（6人）

（問3）1か月平均何冊借りますか

- 1、2冊（255人） 3、4冊（105人） 5、6冊（46人） 15冊以上（5人）

（問4）利用する資料は何ですか（3つ以内）

- ア 専門学科の図書（577人） イ 一般科目の参考書（117人） ウ 一般教養書（73人）
エ 小説類（121人） オ 雑誌（208人） カ 文庫・新書（124人）
キ カセットブック（0人） ク 音楽用テープ等（9人） ケ ビデオテープ（2人）

（問5）現在の図書館で不便なことは何ですか（3つ以内）

- ア 開館時間が短い（62人） イ 場所が良くない（65人） ウ 閲覧環境が良くない（163人）
うち狭い60人
エ 図書や資料が少ない（235人） オ 貸出冊数・期間が少ない（140人）
カ 館員の対応が良くない（48人） キ その他（43人）

（問6）今後図書館に何を望みますか

- ア 時間延長（69人） イ 閲覧環境の整備（84人） ウ 視聴覚コーナーの設置（304人）
エ 電算機による文献検索（156人） オ 貸出冊数・期間を増やす（95人）
カ 読書会の開催（4人） キ 図書館を利用しての授業（68人） ク 学寮に分館を設置
ケ 図書館の公開（15人） コ 館員のサービス向上（72人） サ その他（36人）

（問7）図書館にもっと備えて欲しい資料は何ですか（3つ以内）

- ア 専門学科の図書（329人） イ 一般科目の参考書（63人） ウ 一般教養図書（52人）
エ 小説類（144人） オ 雑誌・新聞（271人） カ 文庫・新書（164人）
キ カセットブック（196人） ク 音楽テープ（173人） ケ ビデオテープ等（184人）
コ その他（34人）

（問8）あなたはどのような方法で本を読みますか

- ア 自分で買う（620人） イ 家にあるのを読む（187人） ウ 人から借りる（333人）
エ 貸本屋から借りる（1人） オ 高専図書館で借りる（249人）
カ 他の図書館で借りる（39人） キ その他（69人）

(問9) あなたは9月1か月の間に何冊本を読みましたか(教科書を除く)

- ア 本 (1冊:102人 2冊:117人 3冊:71人 4冊:36人 5冊:71人……)
イ 雑誌(1冊:44人 2冊:87人 3冊:75人 4冊:52人 5冊:106人……)

(問10) 10月から時間外開館をやっていますが、あなたは利用したことがありますか

- ア 利用したことがある(290人)
イ 時間外開館していることは知っているが利用した事はない(290人)
ウ 時間外開館していることは知らなかった(176人)

(問11) 読書週間の展示を見ましたか

- ア 見た(229人) イ 展示していることは知っているが見ていない(167人)
ウ 展示していることを知らなかった(346人)

以上のような結果でした。本校生の平均的利用と実態は過去のアンケート結果と似たりよったりですが、年々、リッチで優雅な学生気質が顕著に現われていて羨しい限りです。

図書館への要望の項では、実に様々な要望があり、びっくりしました。読書感想文の廃止、古くなった本の販売、水飲み場の設置、館員の低年令化などです。マンガ読みまくり大会を開催して欲しいという回答には、思わずふき出してしまいました。

その他、専門書はむずかしすぎるので、もっとやさしい本を購入して欲しい、専門書の数を増して欲しい、読書会を開催して欲しい、図書館を利用した授業をやって欲しいなど、教官方によく知っておいてもらいたい意見もありました。

図書館員の低年令化の要望には、若づくりする以外手がありませんが、諸行事のPR不足、館員のサービスの向上など反省材料もたくさんありました。

前回の要望のトップだった視聴覚が実現したことは学生諸君にとっては、大きな前進といえましょう。今後も、図書館の充実に向けて、一層の努力をしていきたいと思えます。皆さんの協力をお願いします。



'88年版 出版界・読書界10大ニュース (出版ニュースより)

1. ミリオンセラーが3点に!
『ノウウェイの森』『ゲームの達人』
『大国の億亡』
2. 女性誌創刊ラッシュ
『Peach』(角川)『Pumpkin』(潮)
『SIGN』(学研)『RAY』(主婦の友)
『She's』(CBSソニー)『日経 Woman』
(日経新聞)『Hanako』(マガジンハウス)など
3. 反原発、幅広い盛り上り、関連書も連動して伸びる
4. 目立つ休・廃刊の動き、雑誌界様変わり現象
『平凡パンチ』『ベントハウス』など
5. 消費税反対運動展開
6. 角川書店買切り制導入、出版流通に一石

7. カセット本、ビデオマガジンが書店に定着
8. アグネス論争でブックレットも好調
9. コピー公害で「複写権センター」発足
10. 「ピンクチラシ」に有罪判決!

〔編集後記〕

▶コンピュータ導入、開館時間延長、AV機器設置など、この一年で図書館もずい分変わりました。

永らく図書室の一隅で座を暖めているだけの人間は、激しい時代の移り変わりに青息吐息です。

▶アンケートの中に、コンピュータによる情報検索の要望がかなりありました。一日も早く実現しようと、遡及入力に、全力を挙げています。▶最近返却日が少々ルーズになっています。必ず返却日までに返却を。